

## 集中治療に関する用語について

### 1, 集中治療医学について

#### ○Intensive Care Medicine(ICM)

内科系・外科系を問わず、呼吸・循環・代謝などの重要臓器の急性臓器不全に対し、総合的・集中的に治療・看護を行い、回復させるのが主題。

(出典：集中治療医学会HPより)

### 2, ICUについて

#### ○Intensive Care Unit(ICU)

[英 intensive care unit 独 Intensivbehandlungseinheit 仏 unite de soins intensifs]  
『集中治療部 (棟・室)』

本来集中治療が行われる場所を示す言葉として用いられる。ICUは「内科系、外科系を問わず、呼吸、循環、代謝その他重篤な急性機能不全の患者を収容し、強力かつ集中的に治療看護を行うことにより、その効果を期待する部門である」と定義づけられている。

ICUの成り立ちは大きく分けて3つの流れがある。

[第1]主としてアメリカより伝えられたもので Lockward らが提唱した、病院管理学の立場から考えられた PPC(progressive patient care)という考え方より出発したもので、このなかの重症患者を取り扱う部門(special nursing ward)として。

[第2]北欧におけるポリオセンターや Copenhagen におけるバルビツレート中毒に対する中毒センター、火傷患者を収容する火傷センターなど特殊治療センターより発達したものの。

[第3]手術室の中央化に伴って開設された回復室 recovery room はある時間がくると閉鎖されてしまうので、大きな手術、手術後の経過の良くない患者ではさらに24時間にわたっての観察、治療を行う必要から生まれたもの。わが国ではこれらの3つのそれぞれの性格を兼ね備えていると考えてよく、とくに1965年(昭和40年)頃より人工呼吸器の発達とともに自然発生的にICUが発生し、ICU研究会(現日本集中治療医学会)の発足とともに急激に発展した。最近では、高次の救急医療でもICUの重要さも強調されている。ICUは病院において中央部門としての位置づけがなされており、病院長の管理責任下であり、特殊な設備をもったスペース(1床あたり少なく

とも 20 m<sup>2</sup>以上とその他、目的のための十分なスペース)を確保し、各種の検査、治療器具を配置し、知識と経験の豊かな医師と教育を受けた看護婦を十分に(少なくとも常時、患者 2 名につき 1 名の看護婦)配置して治療効果をあげるようにしている。ICUに入室する患者は原病棟をもつという考え方から、ICUはベット数には含めないようにする。ICUに収容すべき患者としては

- ①手術後の重症患者(とくに合併症を有するもの)
- ②高度の呼吸管理を必要とするもの
- ③意識障害または痙攣の頻発するもの
- ④心不全または心停止のあったもの
- ⑤心筋梗塞及び重症不整脈のあるもの
- ⑥重症代謝障害のあるもの
- ⑦急性腎不全のあるもの
- ⑧急性薬物重症患者
- ⑨急性大量出血患者
- ⑩破傷風
- ⑪重症筋無力症の急性増悪
- ⑫臓器移植患者などがある。

入室させない基準としては、

- ①死亡の確実な末期患者
- ②急性伝染病患者
- ③急性症状のない慢性疾患患者
- ④特殊病棟に収容することがより適当な患者などがあげられている。

すなわち治療効果を期待しないことは原則としている。このような一般的な疾患を取り扱うICUをgeneral ICUと呼ぶが、このほかに特殊な疾患を取り扱うICUがある。すなわち、冠動脈疾患(主に心筋梗塞)を取り扱うCCU(coronary care unit)、術後の患者を主として扱うsurgical care unit、呼吸器疾患を取り扱うRICU(respiratory intensive care unit)、脳疾患を取り扱うNCU(neurological care unit)、新生児を取り扱うNICU(neonatal intensive care unit)、腎疾患を取り扱うRCU(renal care unit)など特殊なICUがある。その他に代謝または中毒を取り扱うmetabolic care unit、中毒を扱うpoisoning center、火傷を取り扱うburn centerなども考えられている。一方ICUの中に、治療を主とするものintensive therapy unit(ITU)、観察を主とするものintensive observation unit(IOU)に分ける考え方もある。ICUよりややgradeを下げて、各病棟に配置するものをhigh care unit(HCU)と呼ぶ考え方もある。

出典：医学事典 ～第18版～南山堂～